

# 我園の一日を (三)

——次 第 不 同——

紙面の都合で一度に掲載し得なかつたため、時候おくれとなり御寄稿の方々にすまないと存じます。お読み下さる方もこの點は何卒御諒察を願います。(編輯係)

○

徳島縣  
白百合幼稚園

山 口 り え

## 八幡様まで

二三日前より一度八幡様の森まで遠足をしませうと約束してあつたのですが前日も前々日も雨であつたので、のびくになつてゐました。此日は快晴ではありましたが道が、まだ少し悪くはないかと思ひましたから、も一日のばせうと思つて午前九時に會集をはじめました。所が割合遠方(五六丁)から來る兒童が五人もお辨當をもつて著物を著替へ遠足姿で參りましたから、其子供等に對して今日の日のべをするのも可愛想だと思ひ全兒に向つて「それでは今日八幡様へ行きませうか明日皆さんがお辨當を澤山もつて著物をきかへてからにしませうか」とたづねましたら全兒は聲をそろへて「先生今日つれて行つて下さい著物は著替へないでよろしい」と申しますから、「それではお辨當どうします」と重ねて尋ねますと「お辨當のない人は取りに歸つたらよろしい」と申しますからそれではお辨當をもつて早くお出でなさい」とて歸らしました。約二十分程で皆々うれしそうに簡單なお辨當をもつて來ました其内に道を小使に調べさしましたが全くかわいて居りますとの事でありましたから、人數を調べて總數六十四人、二人の保母が連れて一ノ組の男には二ノ組の男

とならべ一ノ組の女には二ノ組とならばし大きな兒に小さな子一人づゝの責任をもたせて午前十時に園門を出ました。それから田圃道を十五丁を唱歌など歌ひながら約三十分でお宮へつききました。暫時勞をやすめるために十五六坪の日あたりのよい芝生の上でやすませ、一二の唱歌を終へましてから靜かにお辨當を開かせました。おむすびの兒童が四十三人お芋のふかしたのが十七人おもちが四人皆々ニコニコとして食べはじめました。約三十分程で全部食事がすみましたから、お伽噺を二つして聞かせいよ／＼自由に遊ぶ事に致しました。廣い境内をあちこちとどび廻り檜の實や紅葉などを拾ひ集めて家づゝに大切を持つて居るものや、かくれんぼ、まゝごなどをして居る者などで時の過ぎ去るを忘れるばかりでありましたが、やがて一時半になりましたので呼び集めてそろ／＼かへり仕度にかゝり、又前の様に列を作り歸路につきましたが、往きには三十分で行けた道が、かへりには四十五分もかゝりました、知らず識らずの内につかれて居つたものど見えますが、それでもうれしそうちに一かどの遠足をした様に家路へと歸りました。時は午後の二時三十分でありました。翌日其感想をたづねましたら「檜の實を拾つたのがうれしかつた」「お辨當を食べるのがうれしかつた」「繪馬が澤山あつて面白かつた」「まゝごをして面白かつた」又連れて行つて下さいと申して少しもつかれた様子はありませんでした。(一一・一九)

## ○ 初冬のあゝる日

濱松幼稚園

吉田けん

朝八時と覺しき頃より南北の方面よりエブロン姿の幼い子各々腰にお辨當をつけ三々五々或は兄、或は姉と共に勢よく歩き來る。早出の先生門前にお出迎ふ。先生の姿が目につきたる者は、其手をはなし大急ぎで遠方より先生お早う／＼とささも崩るゝばかりの笑みもて帽子を取るもあり少し顔を横になしつゝおじぎをな

し入り来る。各自持参品を定め、の場所に置きに行き早速滑臺にと走るもあり、ブランコに乗るもあり、砂場にと急ぐもあり、まりつきもあり、テニスをなす故ラケットを貸して頂戴と来るもあり、裏の小さな畑の野菜の様子を観察に行くもあり、其他は丸飛びなど暫くは餘念もなく遊び居る。追々時の進むと共にお連れも増し、大抵日々の出席人員となりたるを見計ひ一先づ室内に入る、(受持保母の呼子の笛の合圖にて)幼兒は運動具の始末をなし、順次室に入る。此室内に入る目的は今日もお友達同志無事に集まり楽しく仲よく遊びませうといふ意味のもとに一寸お早うの挨拶をなす。夫れより好める唱歌の二三をうたふ。歌終れば又々運動場に出す。此間十五分より二十分位、年齢により多少相違す。此日濱松名物の風もなく外出には差支へなき天候故、本園幼兒のみ引連れ停車場裏法雲寺境内に銀杏葉拾ひに出掛ける。四組の子供は、各方向をかへて受持保母の先導にて歩を進ましむ。約十分許にて目的地に前後して到着我勝にご恰も蜘蛛の子を散らすが如くに嬉々として拾ひ始む。帽子に入れるあり、ポケットに押込むあり、中に神經質の子供は一々に拭きつつ拾ふもあり、又は歌をうたひながら拍子をそろへて拾ふもあり、其内寺男長き竿もてたゞきくれる。一同関の聲を上げて集まり來り、互に上になり下になり或は重なり合ひてウン／＼といふては拾ふ様得も言はれぬ面白さ、それよりそろ／＼お土産の仕度といふて絲を貰ひに來りあちこちにてしぼるもあり帽子に一ぱい入れて其まゝ被るもあり、エブロンに入れてあまり澤山にて困つて居るもあり、其内やうやく仕度も出來て一同手に／＼ぶらさげて大元氣で園に歸る。はや時計は十一時を指して居るに、暫時休息の上食事をなさしむ。食前各室とも子供は順次手洗ひ辨當茶碗など運ぶ、保母は食卓を一々拭ひやり一同の静かになるを見ておあがんなさい、頂きます、の禮の後お辨當の口は開かれ、皆やさしき手先にてすます半ば以上食終る迄其儘になし、他の者をまち合はす、大抵になりたる時一同お庭に出す。午前中拾ひたる材料にて、いろ／＼工夫をなす。○時四十五分迄自由になし又々活動をなし、夫れより一同室内に入れて室内遊びになす、一組は摺紙一組は塗方、一組は談話、一組は貼紙など午前の遊びに引かへ靜止的の遊びをなさしむ。なし終れば歸る仕度を始む、仕度のそろひたると同時に、さやうならの挨拶にて皆昇降口さして出で行き、互に友をまち合ひ

隊をなして歸り行く。保母は指定の場所迄一同見送りに行く、子供の影の見えぬをまちて、職員室に歸り互に本日の無事なりし事且樂しげに歸りたるを喜びつゝ食事をなす。(二・二)

○  
琴平幼稚園 久住もこ

午前七時半を先頭に八時半を殿に保母三名出揃ふ。

今日の子供は八時登園の小野博成を先頭に三々五々、嗚呼冷た！と疊の部屋に集る、園婢、保母共に今年初めての大雪とて朝の内暖を探らす可く火鉢の準備などする側に來て、あら！お火鉢！嬉しいな！は云はずに、飛び／＼を仕出す。其後から思ひ出した様に、先生お早うと挨拶すると最前から來て、可成談話を交換した者迄が今更に改つて先生お早う／＼。ゴム毬を持つて日當りの所で四五人遊んで居る者の外今朝は云ひ合せた様に疊の部屋に集つて、石盤とオハヂキが非常に勢力を占めて居る。婆ヤン仕様と隅の方で七十に垂とする園婢と眞面目に競技して居るものもある。

設定室、に今日の仕事と思つて排方の材料(環、板、箸、サイダ栓其他)等豊富に提供してあれども部屋が冷いためか一人も此方には集つて來ない。

遊戯室、はスキップが盛に行はれ疲れた者は、自ら側に呼吸を安めて又加はると云ふ風の中々止み相もない、やがて九時過ぎとなり運動場一面太陽が當ると、筵が引出されて飯事が始まる。砂場が掘られる。高飛臺が持出される。餘程本調子に活動が始まるなど、男兒の一人がお山へ椎檜拾ひに連れて往つて下さいと、要求して來る、行き度い人をお集めなさいと、云ふと喜んで同志を叫號する。集まる者二十六人白組の男斗り、女の方はと聽くと發頭人の曰く今日は危い所迄行くのですから男の方斗りです、蓋、平素は年長兒に年少兒を配して幾分責任感のあるを今日は系累なしの單身旅行と謂つた形で欣々然として一人の保母が連れて往つてまゐります、と挨拶すると、久住先生、お土産持つて歸へりますナ、と叫ぶ者があると後の方から僕

にもナ、妾にもナと要求する者もある、やがて一隊が駆け出すと、留守の者が身邊を取りまいて、明日又皆で行きましやうナ。

十時半頃、廣い部屋でお話して上げましやうと、保母が先づ位置を定めると、サアお話！誰サンお話ですよ、オーイお話じやー早う来いと各自玩具、遊具を、手早く整頓して、成丈保母に近い席をと、詰め寄せて半圓形の席を作る、一通り集る間、唱歌などして待ち合す。

那須の與一!!と絶叫する者があると大江山、桃太郎などの聲も所々に聞え忽ち大勢は那須の與一に決定する、那須の與一は誰の家來?と問へば義經、牛若丸!と肩をびやかして早や想像の境に入る、幾度も聴く話を眼を輝かせ眉を揚げて熱心に時々吐呼吸をもらしつゝ聴く、與一が馬上に神佛を念じつゝ射出す邊は兩手をすつて聴集一同祈願の態可愛らしとも譬へ様なし。

此間に園婢に於て晝食の準備す。

用便を濟ませ身仕舞して食堂(設定室兼用)に入り、最も楽しいお辨當を頂戴す。

先生只今!と登山の連中が各自獲物を振りかざして元氣能く歸園僕の椎檜預つて下さいと、一寸混雜。午後は霜の日の常とて快晴心地よく、盛にならべ方熱中。

採集物を利用されたり、分配されたり、午後二時は思はず過ぎてお仕舞にしましやう、と告げると何をすの?お歸へりにします、早いなー、明日又早く居らつしやい、エ、明日は皆でお山へ行きましやうなど、約束し出席のお判を頂戴して、サヨナラ。(二・二六)

## 運動會の一日

○

臺灣彰化幼稚園

榎

本

磯

格別皆様には御紹介致す様な保育振も記事も持ちませんが唯、先日、小學校聯合運動會を致しました。此の當時の幼兒の喜びは一通りでなく、朝八時に鐘がなると、例になく整列も上手に出来ました。整會集の折に「先生、もういくつ寝ると運動會ですか」、「私、白の前掛ですよ」、「私、元祿袖よ」、「私、筒袖よ」と可愛い談話が交換されます。また保姆方からも無口の子供に話しかけ、一通り皆のお話をすますと、「さあ、運動會しませう」と、裏庭へ出て、輪ぬけ、バスケットボール、風船取りの遊びに夢中になります。十一時に晝食をはじめ、十二時にをほりまして、お砂場で墜道、練兵場其他色々の遊びが演ぜられ、一時になつて室内で表情遊戯、スキップ等をしてお歸りに致しましたのは二時少し前でした。

京都常葉幼稚園 橋 川 和

## 讚佛歌をうたひて

本園は佛教主義の幼稚園でございますから毎朝登園直ちに各園兒自由に佛像を拜禮致させます。又宗祖の御命日(二十八日)には東本願寺に参拜致します。但し本月は都合によりまして二十六日に参拜致しました。

### 一、會集

イ、園長保姆園兒一室に會す

ロ、朝の挨拶(讚佛歌)

ハ、著席

ニ、焼香(各組の男女一名づゝ其の日の番に當れる者出で、焼香す他の幼兒は眼とち合掌して沈黙を守る)

ホ、説話(親鸞聖人の逸話)

ヘ、唱歌(園歌)

ト、行進(手足の運動)

チ、深呼吸

二、外遊

各兒に外出の用意をさせまして幼児用の珠數を持たしまして東本願寺に参りました兩堂に拜禮して出ますと折から上洛中の澤山の參詣人が皆立止つて百三十名ばかりの長列を見てゆかれました。

三、敬佛敬神の念を養ひ引いて徳育に關して簡單なお話をしました。

四、中食

五、自由遊戯

六、手工(綠色摺み紙にて隨意)

七、歸宅準備 (一一・二六)

熊本市 碩臺幼稚園

自然に於ける保育日記

可愛い幼兒達は今日も相變らず元氣なる顔付にて門外よりかけ込みては「先生お早う御座ります」と先づ挨拶夫より携帶品を所定の處におくや否や自己を發揮せん爲め思ひ／＼に玩具の下に走り寄る。ブランコ、共同積木、砂場、筵を取出してはまゝ事遊、或は室内にありて繪本を見るもの他の一群は遊戯室にありてスキツプ遊びに餘念なきものあり、又残りの一群は保姆と共に箒を握り落葉掃除に手傳ふなどとり／＼に忙はし。やがて誰いふとなく一齊に「先生今日は銀杏の葉拾ひに行きませう」といふ、この要求この機會を無視するは如何と思ひ、すぐ様一同を誘ひ玩具の始末をつけ目的地を銀杏城までと定め出發することとなりぬ、喜び一

方ならず。

可愛い子供は自然の中におけとやら、乙組は甲組に手を引かせ二列となし片手には花籠を持たず。道々子供等の事物観察を語り交ふを聞くも面白かりき。にこ／＼したる天使の如き幼児等を見ては道行く人は可愛らしい／＼と歩みをとむ。

歴史ある銀杏城下に著くや、幼児達は恰も蜜蜂の如く多忙なり盛に唱歌を歌ふもの頻りに銀杏の葉を籠に入る／＼の一方には道端の野菊を摘み髪にかざす者紅葉の葉を拾ふ者等ありてさも樂しげなりき。稍々勞れたるものは樹の下に休み飽きたるものは保母の許に銀杏城の話をきく時に十一時過ぎなり。

先生もう御飯食べに歸りませうと一同集る中にはまだ飽き足らぬ者もありき。獲物なき者は一人もなし十二時過ぎ漸く歸園しすぐ様食事にとりかゝる。

幼児の獲物は自慢の土産となりて午後は幼児の採集したる木の葉を手工材料となし保母も一緒になりて製作す。

出来上りたるものは

1、蝶、日の丸の扇子、帆掛船、(銀杏の葉ニテ)

2、紅葉川、(楓の葉ニテ) 以上貼付

3、野菊人形、(色紙ヲ著物トシテ)等なりき。

斯の如く思ひ／＼に興を盡して製作したるものを土産として歸途につきたるは午後二時なりき。

幼児歸宅後の園内は大風の後の如し、其の日／＼の反省は保母の間に語り交さる、語り交されたるものは、研究の出発となり資料となり經驗の改造となる「さても效ある保育は自然開放にあり」とは當園反省の一語なり。



## わが園の一組

昨夜來の風のために、雨はすつかり吹き上げられてしまつて、空は晴れたれども、今日の寒さは、實に格別である、火のある室内でさへも四十八度に下つてしまふ程である。幼兒等は皆顔の色を悪くして、『先生お早う』にも何時もの様な元氣がない。それでも奉安所の前だけでは、こゝばかりはといふ様に、しつかりした態度で、行儀正しく禮拜をする、感心してしまふ。

今日は雨後のことゝて園庭へは出られぬ。先づ梅の組の室に入つて見る。英次郎さんは一生懸命に、黒板に汽車を畫いて居る、その隣では庄一さんが熱心にお手習『高田庄一』と三行だけ書き並べて、今や四行目の書まで書いた所である、ヂツとそれを見つめて居ると、とんだ運筆で書いて居る。よく正してやつたら、早速改めて書けた。

園庭には、外用机が、積木をのせたまゝに、人待顔にして居るけれども、地面がしめつて居ると、寒いので、今日ばかりはどの兒も寄りつかない。時々ポカ／＼と照る光りに、あたりたく、皆南開きの廊下にヂツと座を構へて、今全盛のあやとりに餘念がない。腕白で／＼嫌はれ者の一さん、此お子ばかりは、どこに無邪氣が見えるのだらうと思つて居つたに、近來新らしき、あやとり方を覺えたさて、喜んで熱心にやつて居る、その顔にもやはり子供らしき邪氣のない所が、現はれて居る。

時計は見ぬ間に、最早九時を過ぐるこゝと二十五分、お並びの鐘は鳴り響いた。お鼻の出で居ること夥しい。お草履をはくこゝの大嫌いの信一さんも、冷たさには堪へられぬ氣に、今日だけは、言はれぬ前に、チャンとはいて居つた。

會集でのおつとめは、落著いてよく出來た、主任保母から『お客様に對する禮』についてお話があつた。そ

して會集は終へられ、律動に移る。桃の組の幼児が最初に歩き出して、やさしい遊戯を二三すませて、外に行つた。残る梅櫻の組の幼児に、主任より兵隊さんの遊戯を指導せられる、調子も面白いので、幼児達も覚え様とはして居つても、中々に足の運びが思ふ様に行かない。保育室に歸つてからも、小人數づゝ出して稽古を試みた。十一時までは思ひ／＼に遊ぶ。後、入室の上、書き方をする、自分の帖面に、自分の色チョークで書くといふ事が、幼児等にはどんなに満足なのだらう。嬉しげに。始終ニコ／＼として、さも大切に取扱はうと心がける様が見受けらる。綠色に美しい野原が塗ら上げられた時は、最早正午に間近い。手洗湯も用意されて居る。正太郎さんが、いきなり『先生、うちのねいちやんが、今日はお辨當でないつていつたんで、持つて來なかつたの』と大變姉様がうらめしいといふ風に、何度も／＼告げて居る、よくいひふくめて歸してやつた。

冷たいお飯を口にする幼児等を見通して、何とも氣の毒に堪へられぬ。喜久江さんが、また『おかづが氣に入らぬ』とてほんのポツチリきりで止めてしまつて、何といつてもきゝ入れない、ほんどに、此お子の我儘、殊に食事に於ては、一層困つてしまふ、明後日の母の會には、よくお母様に、御相談申上げねばなるまい。他は一人として残した兒もなく、机がよごれ／＼ば、どうしてもそのまゝには居られないといふ風に、自分で雑巾を持つて行つて、可愛い／＼手つきで、掃除をして居る、ほんどに、思はずほ／＼笑ますには居られない。皆が食べ終つて外に出ても、例の通り、虎太郎さんだけは、誰にもお構ひなしに、量の多い御飯を、悠悠と構へてポツ／＼と食べて居る。

午後は一時になつた時、入室した。歸り支度を整へてから、明後日の母の會の通知書を、保護者にとて、與へて、一定に疊ませて『左様なら』で別れを告げた、一同は順々に奉安所に入つて、御影にお歸りの禮拜をして歸つた。

未だ寒さは變らない、けれども考へて見れば、後一週日と經たぬに、師走に入る時だもの、これが普通の氣候になつたのだらう。(一一・二五)

## わが園の一日

今日は私の當番なので八時少し前に出勤した。もう初冬といふのに四五月頃の暖かさである、幼児は何れも登園直ちに

奉安室に入つて禮拜をし、お部屋にお辨當を置き下草履をはいてのんびりしたる庭に下り立つた。箒の目の正しい庭にはいくつかの臺石が据ゑられてある。道の堀岸から取つて来た小草をついでまゝ事遊びをする女兒の群も可愛らしい。是等の石のこゝに据ゑられてから早や五年幼児の友となつて夥しい穴が出来た、雨の日を除の外は何時もちゝで遊ぶあさ子ちやんが、今朝はまだ姿が見えぬ、お向ひの土手には直ちやんの指揮の下に木銃をかたげた二十人ばかりの小さい兵隊さんが戦ごつこに餘念がない。列の最後に居た一郎さんが保母と視線の合つた時にはいひ知れぬ得意の様が見えた。此一隊中に最年少の桃の組から加つて居たのは一郎さん一人であつたからだ。女にしても見まほしき哲四郎さんに此一隊に加はらん事をすゝめたが無言のまゝで庭机の上の積木をいぢり始めた。私は此子の笑顔を一度も見ただ事がない。幼稚園がおもしろいのや厭なのやらとんとんかわからない、此間母の會の折にこの子のお母さまのお話では「幼稚園は大好きでいさんで登園をする」この事であつた。そこへ千鶴子さんがかけて来て、「先生あやとりを」と早や自分の手くびに紐を巻き付けて出す。近頃聊かすさみ勝ちなる氣分を落ちつかせやうとのつもりで與へた此あやとりが男女の別なく大流行となつて案外に好果を収めたのは嬉しい。

日當りの廊下は幾組みの「あやとり」に占領されてゐる、世話好きの邦ちゃんはその間を一生懸命になつて教へて歩く。

すべり臺と遊動板とは誰も居らずにお休みの形である。此暖き日に砂場の閑却されてるのは残念と久しく使はなかつた砂場玩具を持ち出して二間四方の砂場に飾り立てる。先づ公園から別荘、農村といふやうに輪廓だけを作つてあとは幼児四五人に作らせた。畑には草を植ゑて野菜に見せ牛馬を放ちて農家を建て家の

側面を鐵道が通つてトンネルをくゞると山の麓に出る、別荘地を右に見、公園の後を通つて都會に入る設計である。先づ見事に出來たのは公園である。ベンチにはお人形を腰かけさせ、草むらからは兎がとび出るといふ趣向である。ブリキの汽車が動きはじめると砂場を圍んで是等の作業を見て居た幼児連が「今は山中」と鐵道唱歌を歌ひ始める、砂場遊びをよそにしてブランコ乗りに餘念のなかつた幼児までが之に和して歌ひ出した、實にのんびりとする。時は十時を過ぎて居る。砂場の構成も完結を告げたので次のお遊びを約して砂場を引き上げ各組ともお部屋に入らしめた。

今日はてる子さんの誕生日である。てる子さんを一同の中央に出して皆からのお祝の言葉を受けさせる。一同は更に祝の歌を唄ふ。誰も彼もさも嬉しさうである、てる子さんはお禮にとて鬼が島の唱歌を獨唱した。而かも透き通るやうな可愛い聲で。それから幼児の望をきいて進軍、お人形、月夜の兎等の表情遊戯をなす。終つて再び外遊に出た時は十一時少し前であつた。幼児は砂場に下り立つのもあり臺石の餅搗きに友呼ぶ子もあり、あやとり糸をかりる子もあり、お部屋に入つて色チョークをつかふ子もあり、それ／＼向き／＼の方に遊びを求める、砂場は櫻の組の幼児によりてきれいに片づけられてあつた。たゞ畝を作つた畑のみがそのまゝで。

三脚の庭机には積木の大きな山が出來た、太陽は心地よく幼児をてらして居る。

遙かに遊戯室からピアノの音がする。櫻の組のお遊戯が始まつたのだとさだ子さんが教へる。時に十一時二十分、お辨當の時に近づいた。手を洗ふお湯は各室の入口に配られて居る、内外の草履をはきかへ手を洗つてお部屋に入る。二人の女兒は甲斐／＼しく机上を拭いて行く、お辨當とお茶碗とは一所に机上に置かれる、お辨當の歌は静かに歌はれた、お挨拶と共に辨當袋の紐はゆるめられ樂しき食事は始められた。何れも無言で母の情けを味ふものゝやうに。食卓を見廻つて何かと心づけてやる、未だ一椀も平らげまいと思ふ時に「先生お湯を」と鐵ちゃん云ふ。今日も又ご飯を少なく持つて来てこんな早いのであらう。母の會の折にお母さんが「父が子煩惱で子供のいふなりに間食をさせますのでご飯は少量きり頂きますせん、然しお辨當は

家で頂くより多いのです」との事であつた、どうしても園と家庭とは一致しなければ駄目だと思つた。たゞ終つた方から「馳走様」の挨拶をなし茶わんを始末して室外に出る、晝過ぎの自由遊びはあつさり行はるゝのである。後片付けの出来た處へ再び室に入りお支度をして奉安室にて歸りの禮拜をし先生左様ならの言葉を殘して元氣よく家路をたどつて行く。時に午後一時。空には一點の雲もないほんどうにめづらしい日和であつた。(二・四)

思 ふ ま へ

T Y 子

ある朝、カンカラに凍つた道を電車へと急ぐ時、ふと、妙見堂から響く、朝のおつとめの太鼓の音がたまらなく懐しく聞えた。ドンドンドンドンと打つその音に、私は、何時になく、靈魂たましいなそゝられる様な氣がした。いゝものだと思つた。やつぱり人間には、原始人の血が身體の何處かに流れてゐる。だから、時に、かうした原始的の音が、それに共鳴してたまらないなつかしさを與へる。

文明は人を怜悯にした、器用にした、そして理智の眼で何でもを見る事を教へて呉れた、人は美しい情の持主である事をさへ忘れ勝ちになつて。太鼓たゝいてするおつとめが迷信で、密室で見えざる神にさゝぐる祈りが本當の信仰だと人は言ふ。さうかもしれない。けれども私が感じた、この朝の太鼓の音はよかつた。原始の人は感じた、そしてそのまゝおこなつた。文明の我々は悟る、そしておこなふ迄にはなかく大變だ。

子供は、知らないけれども感ずる。子供の心は、あの妙見堂から響く太鼓に私よりもつとつよい共鳴を感ずるに違ひない。やつぱり私は文明の空氣を吸ひ過ぎてしまつた。原始の人間の持つべき情を、どうかすると、否骨折つておさへてしまはうとする。子供の心がわからないとあせつても、これでは、解らない筈だ。理智と云ふ原動力では動き出すが、「何とも云ひしれぬ感じ」ではなかく動かなくなつてゐる、きこえない機械の様な心の持主がいやになつた。(二月のある日)